

平成21年4月1日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19500208
 研究課題名（和文） 地域メディアの市民編集の研究-「笠懸公民タイムス」を事例として-
 研究課題名（英文） Research of the Citizens Editorship of Community Media
 -A Case Study on “Kasakake Koumin Times” -
 研究代表者
 森谷 健（MORIYA TAKESHI）
 群馬大学・社会情報学部・教授
 研究者番号：10230161

研究成果の概要：

これまで断片的にしか把握されていなかった「笠懸公民タイムス」の市民編集について、創刊当時から廃刊までの全期間について検討できた。

また、編集委員へのアンケート調査とインタビューを実施し、編集に関わった市民の意識を把握できた。

これらについては、報告書を作成し、関係者や群馬県内関係機関に配布した。

さらに、市民編集を歴史的に遡及する試みとして、長野県内に現地調査を実施し、今後の研究への糸口を見出した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	300,000	90,000	390,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学

キーワード：人文社会情報学（情報社会学）

1. 研究開始当初の背景

「笠懸公民タイムス」は、「社会教育法」、「笠懸村公民館設置条例」、「笠懸公民タイムス発行規則」（笠懸村教育委員会規則第9号）によって保証された群馬県笠懸村・町（現群馬県みどり市笠懸町）の公民館の館報であった。

「笠懸公民タイムス」は1949年1月1日に創刊され、数回の廃刊と復刊の後、2006年3月に廃刊となり、本稿執筆時点では復刊されていない。編集は、基本的に住民による編集委員会が行った。

「笠懸公民タイムス」は、号外や特集号を除き、タブロイド版またはA4版2頁ないし4頁の形式で注に示すように527号まで発行された。

「笠懸公民タイムス」の発行費用は、ごく初期（第25号まで）を除き、公費（笠懸公民館予算）により、第26号からは笠懸村（町）の全戸に無償配布された。

「笠懸公民タイムス」は、優良な公民館報として、1950年5月に群馬県広報課主催の市町村広報等展示会において表彰され、公民館自体も、1948年と1949年に優良公民館と

して群馬県知事表彰を受け、1988年には文部大臣表彰を受けている。また、1975年に第15回社会教育研究全国集会で発表を行うなどして、社会教育の分野において、群馬県内だけでなく、全国的に注目された。

しかし、「笠懸公民タイムス」は57年に亘り市民編集を貫いた公民館報であったが、社会教育分野で注目されるにとどまり、市民編集の地域メディアとして取り扱われることがなかった。

本研究は、地域メディアとしての「笠懸公民タイムス」を、これを取り巻く状況（全国的な社会教育行政・笠懸の地域社会）や市民における編集体制に注目して研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では、近年注目されている市民編集について、インターネットのサイトやブログなどICT分野ではなく、むしろ歴史的に古い紙メディアに注目し、市民編集が60年近く前から存在したことを明らかにし、市民編集が、全国的・地域的な諸要因によって規定されることを明らかとした。

3. 研究の方法

「笠懸公民タイムス」縮刷版と笠懸公民館の歴史をまとめた文献および笠懸村（町）誌を精読した。

上記から得られた知見に関して市民編集関係者7名にインタビューを実施した。

予備調査として実施していた編集に携わった者へのアンケート調査を分析した。

「笠懸公民タイムス」と同様に戦後間もなくの時期から発行を続けている公民館報を検索し、その結果から判明した長野県飯田市周辺の公民館報については、現地において資料収集および公民館関係者へのヒアリングを行った。

4. 研究成果

(1) 初期公民館の全国的状況

「笠懸公民タイムス」が発刊される直前の1946年頃に出された「文部次官通牒」や『公民館の建設』に提示された初期公民館は、狭義の社会教育機関に止まらない。それは、社会教育、社交娯楽、町村自治振興、産業振興、青年養成の諸機能を兼ね備えた郷土振興（村づくり、町づくり）の中核的機関、総合的文化施設にほかならなかつたとされる。

しかし、1949年頃初期公民館はすでにその総合性に行き詰まりが見られる。初期公民館の活動内容は、生産復興・生活向上、失業救済・生活安定、文化・教養活動の三つに大別できるとされるが、生産復興・生活向上の活動は農業改良普及所・農業協同組合などの活動により、また市町村農林行政によって停滞する。失業救済・生活安定の活動も全国的な

福祉行政の充実によって弱まっていった。文化・教養活動は、民主主義理念の啓蒙・普及および民主主義的態度の養成には一定の役割を果たしたが、同時に中央・地方の指導者層を通じて市町村行政への協力を軸とした住民の体制順応的姿勢の強化に寄与したとする見解がある。

このように、初期公民館は、当時の社会的・経済的・行政的な状況の変化により、総合性を失って急速に社会教育機関、ただし中央・地方の指導者による住民の体制順応的姿勢の教化機関としての性格を強めていったと考えられる。

(2) 笠懸公民館の状況

笠懸公民館は、当時の村長により設置が呼び掛けられた。「笠懸公民タイムス」記事やインフォーマントによれば、終戦直後の村民、特に青少年の現状を目の辺りにした村長の、「村内の誰でもが気楽に集まり、話し合える場所、『館』を造りたい」「村民や青少年の話あいの場、考える場、また人づくりの場」を作りたい、それが戦後復興や民主主義浸透の拠点となるという率直な気持ちで、設立の主要な動機であった。これは、初期公民館の特徴である、社会教育、社交娯楽、町村自治振興、産業振興、青年養成の諸機能を兼ね備えた地域づくりの中核的機関、総合的文化施設にほかならない。

その後、笠懸公民館は、地域づくりの総合機関として活動を続けるが、逆にそれは、総合性を失う結果となった。すなわち公民館の各種活動は、生産復興・生活向上、失業救済・生活安定について、それぞれ専門的な組織・機関の萌芽・人材を形成することとなり、それらの活動は、公民館を離れそれぞれの専門的な組織機関にとって変わられることとなった。笠懸公民館の総合性は、いわば、自己回帰的な逆機能を果たしたこととなった。

(3) 「笠懸公民タイムス」

笠懸公民館の館報である「笠懸公民タイムス」は当初から総合的な地域づくりメディアを標榜した。地域づくりの拠点をめざす設置当初の笠懸公民館の性格からすれば当然のことである、

公民館本体が総合性を失っていく中で「笠懸公民タイムス」はその総合性を失うことはなかった。それは、社会教育施設として回収されていく公民館とは別に、市民による編集体制が堅持されたことによる。編集委員が辞職したり、村行政幹部が編集人になったり、発行所自体が村役場になったりする混乱が見られるものの、編集委員は、公民館設置の立役者であった村長の考え方である「公民館は地域づくりの拠点」「戦後の笠懸への民主主義の定着」を「笠懸公民タイムス」の編集方針とし続けた。

しかし、この方針は、ジャーナリスティッ

クな記事を産み出すこととなり、村行政・村議会への監視機能が村民の注目を浴びた。その結果、村行政・村議会との関係は、必ずしも良好なものとは言えない状況にもなった。

このような状況は1966年頃まで続く。1966年に発生した笠懸公民館が関連する子どもの死亡事故により、公民館長や職員の配置転換、それに抗議する編集委員の辞職により、編集体制の混乱が始まる。村行政幹部が編集人となる事態や発行所自体が村役場となる場合も見られるようになる。編集委員も「当て職」的な委員も見られるようになる。

この混乱は、編集委員や読者である村民から問題視され、1966年以前の編集体制、すなわち公民館が発行所であり、村民による編集委員会が機能し、編集人は編集委員から出る体制が復活した。

しかし、先のジャーナリスティックな編集方針やこの混乱を踏まえ、編集委員や編集委員会に関する規則が制定されることとなった。この規則化は、一方でそれまでの「笠懸公民タイムス」の性格を制約するものであったが、他方で編集委員からすれば、自らの立場の根拠となるものであった。

この規則の制定を一種の制度化とみるなら、編集委員自らが打ち出した定期発行もまた、制度化の一つと言える。定期発行することで形を整えた「笠懸公民タイムス」であったが、その背後には住民による編集作業の困難さがあった。仕事を抱えながらボランティアな編集作業は、滞る場合もあった。また、この時期、笠懸は都市化・混住化の過程に入り、農業従事者・地付き層の同質的な編集委員から、来住者の増加により、異質な編集委員構成となっている。これにより、従来からの「地域づくりのため」「民主主義の浸透」という編集方針が弱められる結果となった。

編集に関する規則の制定や編集委員構成の変化によって弱まったとはいえ、「笠懸公民タイムス」は、「民主主義の浸透」を標榜し続けた。公明選挙推進キャンペーンや村議会運営批判、合併問題の詳細掲載などを記事にし続けていく。

このように「笠懸公民タイムス」は、市民編集体制を堅持し、地域づくりのためのメディアを標榜し続けたが、平成の大合併により、笠懸町（村）が消滅することにより、廃刊となってしまう。しかし、「笠懸公民タイムス」の編集方針を継承し、公民館報＝公費による発行ではなく、市民の手による地域づくりのためのメディアが現在も模索し続けられている。

(4) 編集委員アンケート

本研究を開始する前に、予備調査として、みどり市笠懸公民館の協力により、同公民館が把握している歴代の「笠懸公民タイムス」

編集委員172名を対象者としたアンケートを実施した。

本研究において、このデータを分析した。

①「笠懸公民タイムス」の性格

データによれば、「笠懸公民タイムス」の性格は、「公民館の情報」を提供するもの他に「住民活動の情報」を提供するもの、「公民館についての論評」を行うもの、「自治体行政についての論評」を行うものと認識されている。これは、上記の「地域づくりのためのメディア」「監視機能を有するジャーナリスティックなメディア」の捉えたかと合致している。

②出身による性格付け

出身によって「公民館についての論評」と「自治体行政についての論評」に違いが見られる。笠懸出身者にとっては、「公民館についての論評」と「自治体行政についての論評」はとりわけ重要な情報と認識されている。しかし、笠懸への転入者にとっても、「公民館の情報」「住民活動の情報」「公民館についての論評」「自治体行政についての論評」は重要視されている。「趣味娯楽の情報」は出身を問わず、あまり重要とされていないが、比較した場合、転入者に少し重視している。

③編集委員時代と記事の重要性

これを更に、1991年の月刊定期発行の前で比べてみる。「公民館についての論評」については大きな変化はないものの、「国政論評」「自治体行政論評」の重要性が減少し、「公民館情報」の重要性が増大している。これらから、時代によって、「笠懸公民タイムス」の性格についての認識が変化していることが考えられる。

これらについては、報告書を作成し、関係者や群馬県内関係機関に配布した。

④長野県の類似メディアの探索

さらに、市民編集を歴史的に遡及する試みとして、長野県内に現地調査を実施し、今後の研究への糸口を見出した。

具体的には長野県飯田市の公民館報発行状況を以下のように整理することができた。

地区・村名称	創刊日	出典
座光寺	1947年	『飯田市公民館活動史』
松尾	1947年	『飯田市公民館活動史』
下久堅	1949年	『飯田市公民館活動史』
千代	1949年	『飯田市公民館活動史』
龍江	1949年	『飯田市公民館活動史』
竜丘	1949年	『飯田市公民館活動史』
川路	1949年	『飯田市公民館活動史』
三穂	1950年	『飯田市公民館活動史』
山本	1949年	『飯田市公民館活動史』
伊賀良	1948年	『飯田市公民館活動史』
鼎	1949年	『飯田市公民館活動史』
上郷	1948年	本調査

また、これら公民館報の前身とも考えられる「時報」「村報」の存在をこの地域に見出

した。

主な「時報」「村報」は以下の通り

「伊那時報」	明治 41 年
「上郷時報」	昭和 3～15 年
「竜丘時報」	昭和 5～15 年
「下久堅時報」	昭和 7～15 年
「鼎時報」	昭和 8～18 年
「山本時報」	昭和 11～15 年
「松尾村報」	昭和 11～15 年
「山吹時報」	昭和 8 年
「大島時報」	昭和 7 年

(5) 研究成果のまとめと今後の研究課題

①

長く公民館新聞が発刊され続けた理由の一つに「住民の力」がある。「笠懸公民タイムス」の発行主体である笠懸公民館は、社会教育施設として、ある意味で整備され、地域づくりの拠点としての性格は、社会教育施設としての性格に回収されていく。しかし、その館報である「笠懸公民タイムス」は、初期の性格を堅持し続けている。公民館が変化していく中で変化しなかったのは、住民が編集を担ったことである。長く公民館新聞が発刊され続けるためには、読者である住民の支持は不可欠である。読者である編集委員が住民の立場で編集を担い、しかも、その体制を 57 年間も保ち続けた「力」が、「笠懸公民タイムス」の 57 年間を支えたと考えられる。

同じように長く発行を続けた公民館報を今回の研究によって長野県飯田市周辺に見出ししており、さらなる比較研究が重要となる。

②

その「住民の力」は歴史の中で作られてきたのではないかと考えられる。長野県で見出した明治・大正期からの「時報」「村報」は、現時点では、住民による編集という点において、その後の公民館報前身と捉えている。明治・大正期まで遡る住民編集の歴史が、最近の「住民の力」を形成し高めてきたのではないかと考えることができる。これについても、検証作業が重要である。

③

現在、HP やブログについて、市民の情報発信が注目されている。また、紙メディアやビデオ、インターネット放送局などで「市民編集」が注目されている。しかし、インターネットやビデオ、フリーペーパー以前の古いメディアの中にも、「住民による情報発信」があったことが確認できた。新しいメディアでの市民編集と古いメディアでの市民編集の異同の検討は、今後の重要な課題として指定される。

④

市民編集とは市民がメディア製作に係わることであるが、これによってメディアやそのコンテンツが、市民編集とは異なる質になることは従来から議論されているところで

ある。しかし、本研究の過程で散見されるのは、市民編集が、これに携わる市民の意識・態度、知識、地域社会への関心に大きな変化を与えることである。

これはこれまであまり議論されてこなかった重要な論点であろう。

⑤ 新たな疑問

I 長野県では各公民館報の前身と目される「時報」「村報」が確認されたが、「笠懸公民タイムス」の前身は見つかっていない。「笠懸公民タイムス」に前身はないのだろうか。また、群馬県では「時報」「村報」自体が確認されていない。

II 「笠懸公民タイムス」は合併によって廃刊となったが、その後も市民による同趣旨のメディアが模索され続けている。この新しいメディアの成否を左右するものは何か。時間の経過や笠懸の地域社会状況の変化によって、「笠懸公民タイムス」を支えた要因と、この新しいメディアの成否を左右する要因は、異なる者になるのか。

これらの新たな疑問と先に掲げた今後の研究課題が導出されたことにより、本研究は次なる研究の糸口を見出したと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[その他]

森谷健、報告書「地域メディアの市民編集の研究-「笠懸公民タイムス」を事例として-」(全 286 ページ)の発行・配布

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森谷 健
群馬大学・社会情報学部・教授
研究者番号：10230161

(2) 研究分担者

なし
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし
研究者番号：